The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	転ばぬ先の杖
Author(s)	関本, 善正
Citation	癌と人. 1989, 16, p. 12-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24041
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

転ばぬ先の杖

関本善正*

今からちょうど9年前の9月の末，友人とつれだってゴルフにでかけた。秋晴れの青空のもと，心身ともに快適，常にないよいスコアでアウトを回り，上機嫌で昼食をすまし，10番ホールに向かった。ところが，途中で急に下腹に激痛を感じ，気分が悪くなった。せっかく楽しみにしていたゴルフだったが，事情を話しプレイを断念，茶店にはいった。救急車を呼んでもらおうかと思ったが，辛抱して横になった。数時間後，友人達がプレイをすませて帰ってきて起こされ目を覚ました。お陰で痛みも去り，いっしょに一風呂あびて夕食をとり帰宅した。それ以後全然異状もなかったが，翌週会社の医務室に先生を訪ね，その間の事情を話したところ，念のため検査してみようということで胃のレントゲン検査を受けたが異状はなかった。ついでに腸の検査をしたらとのことで大阪大学微生物病研究所附属病院を紹介していただき，10月9日に入院，腸のレントゲンならびに内視鏡検査を受けたところ，S字結腸に潰瘍が発見され，早速手術を受けることになった。一度の激痛以外，今まで何等の異状も感ぜず，至極元気だっただけに，とてもショックだった。手術日の3日前から食事を制限された。以前はお粥食だったらしが，試験的とかで宇宙食が与えられた。相部屋の同じ病気で手術をされた方から，手術の模様など耳にして，多少とも心構えができたが，やはり不安だった。10月16日の朝，9時過ぎに手術室にはいった。まだその時は麻酔がされてなく，白衣姿の院長先生や多くの先生，看護婦の方々を拝見，手術室の上に垂れ下がっている大きな幾つものライト，数多くのメスなどが目にとまり異様な雰囲気に唯ならぬものを感じた。しかし既に観念しているせいか，左程に不安感はなかった。やがて麻酔注射が打たれると昏睡状態に落ち入った。手術は12時過ぎまでかかり，そのあと病室に運び込まれたようだ。何んでも大腸を15センチ余り切断，悪い箇所を削除していただいたらしい。5時頃意識が戻ると，そばに家内と長女がいて，私の目覚め顔を眺め，ほっとした様子だった。当日は夜遅くまで院長先生始め主治医の先生が2，3回様子を見にお越しいただいた。本当に頭の下がる思いがした。手術後，腹膜炎その他の併発諸病もなく，総て順調に推移した。4日後，ベットから降りて少しでも歩くように云われたがためらった。12日目に入浴を許された。お腹を見ると切った縫い目が赤黒くはれあがり，まるでみみずがはっているようで，変わりはてた姿に驚いた。ようやく11月7日に退院の許可が出て，28日ぶりに帰宅やれやれとほっとした。手術前83キロあった体重が69キロまでに減量，実にスマートになった。今から考えると，入院以前何の異状もなかったと思っていたが，やはり大便の都度少量の血便を見たが，痔が起きた位にしか思っていなかった。さて退院後今日に至るまで，まる9年間も通院を続け，田口院長先生に受診ご指示通り服薬している。その間，胃の内視鏡検査3回，腸の内視鏡検査を1回程受けたが，特に異状は見られなかった。時折り採血検査，検便も受けている。先日レントゲン写真を見せていただいたが，大腸の継ぎ目も判らぬまでに全治していた。お酒は殆ど口にしない。煙草は手術後半年位やめていたがまた吸うようになった。ある日，

*伊藤忠社友会　事務局長

テレビで喉頭ガン，肺ガンの講座を見て，その悲惨さを痛感するとともに，家族に与える不幸を思い浮かべ，禁煙を決意した。忘れもしない3年前の3月14日から，完全に禁煙生活にはいった。2・3週間は夢に見る位煙草が恋しく，幾度誘惑にかられたか知れない。昨今では何の抵抗も感じない。むしろ禁煙ができたことを感謝している。さりとてあの食後の一服の味わいが今も忘れ難い。煙草は魔物のようだ。健康を願うなら是非共禁煙をお勧めする。「判っているがやめられない」と歌にもあるが，要は心掛け次第であろう。次に私が伊藤忠社友会のお世話をしていることを田口院長先生がお知りになり，大腸ガン検査をされてはと助言，格別のご配慮を賜り，昨年11月に社友会メンバーに通達したところ，98名の申し込みを受けた。検査の結果，なんと15名も要精密検査者が見つかり，内5名の方が手術を受け，ことなきを得られた。本人はもとより，奥様から大変感謝され恐縮した。世に恐れられるガンは，早期発見，処置をすれば，殆ど心配なきまで医学は進歩したが，健康体といへども毎年受診されることが望ましい。健康管理は自分自身で率先実施する以外ないと考える。今年も会員各位から強い要望があり集団検査を実施することになり目下受検の手配中である。思うに，私の病状については，今だに私から聞こうともしないが，田口院長先生も口にされない。恐らく初期の大腸ガンではなかったかと推測している。

こうして手術から9年過ぎて73歳を迎えた今日，風邪一つひくことなくたびしげく海外旅行に出掛けゴルフもできるまでに健康体になったのも，早期発見，早期処置の結果であるとともに，経験豊かなその道の権威，田口院長先生始め諸先生の適切な処置の賜物と，深く感謝している今日である。私の体験から例え健康体であっても年に1度は精密検査を受けられることをお勧めする。

最後に治療医学はもちろんのこと，予防医学の重要性を全国民がより一層認識し，事前に対応するならば，昨今問題になっている莫大な健康保健費の急増，その他の諸問題も自ら解決されるものと確信している。幸い財団法人大阪癌研究会におかれては，積極的にガンの予防対策を実施されており，誠に有り難い次第である。一般大衆が，より一層その必要性を認識し，自発的に自身の保健対策を実行されんことを切望してやまない。

余談になりますが昭和34年10月永年の海外駐在勤務を終えて帰国した機会に東京築地にある聖路加国際病院の人間ドックに入院した。予防医学にご熱心な日野原重明院長先生が勧められていたドックで，当時日本では画期的な検査方法だったが一般には余り利用されてなかった。日曜日に入院，土曜日の退院までの一週間ぎっしり組まれたスケジュールで，からだ全体の精密検査を受けた。その結果は体重を10％程減量する以外異状なしとのことで安心した。入院費42,400円支払った。当時としては高額な料金に思われたが実に行き届いた内容であった。退院の前夜はサヨナラパーティーまで催された。現在聖路加人間ドック同窓会が毎年春に催され今年34回目を迎えることになった。受診者も延べ12,000名を越すとのことである。昨今では全国各地の病院で一日ドックでも受診出来るまでに普及したことは誠に幸いである。火事と同じように火が出ない前に消すのが長寿を全うするコツと云えよう。

“転ばぬ先の杖”これが私の信条である。